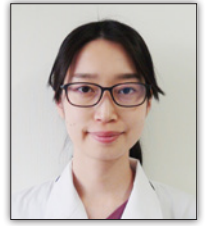


特集

子宮がんの早期発見と 予防について

産科・婦人科 医師
兼森 美帆
産婦人科専門医



1. 女性に特有のがんについて

21世紀の日本人の最大の死因は、悪性腫瘍（がん）です。男性の約半分、女性の約3分の1ががんにかかります。女性に特有のがんといえば、子宮頸がん、子宮体がん、卵巣がんなどがあげられます。



2. 子宮がん検診について

子宮がん検診は“子宮頸がん検診”と“子宮体がん検診”とに分かれています。

子宮頸がん検診は、精密検査が必要かどうかを判別するために行う細胞の検査です。20歳以上の年齢の女性は基本2年に1度検診を受けることが勧められます。【図1参照】

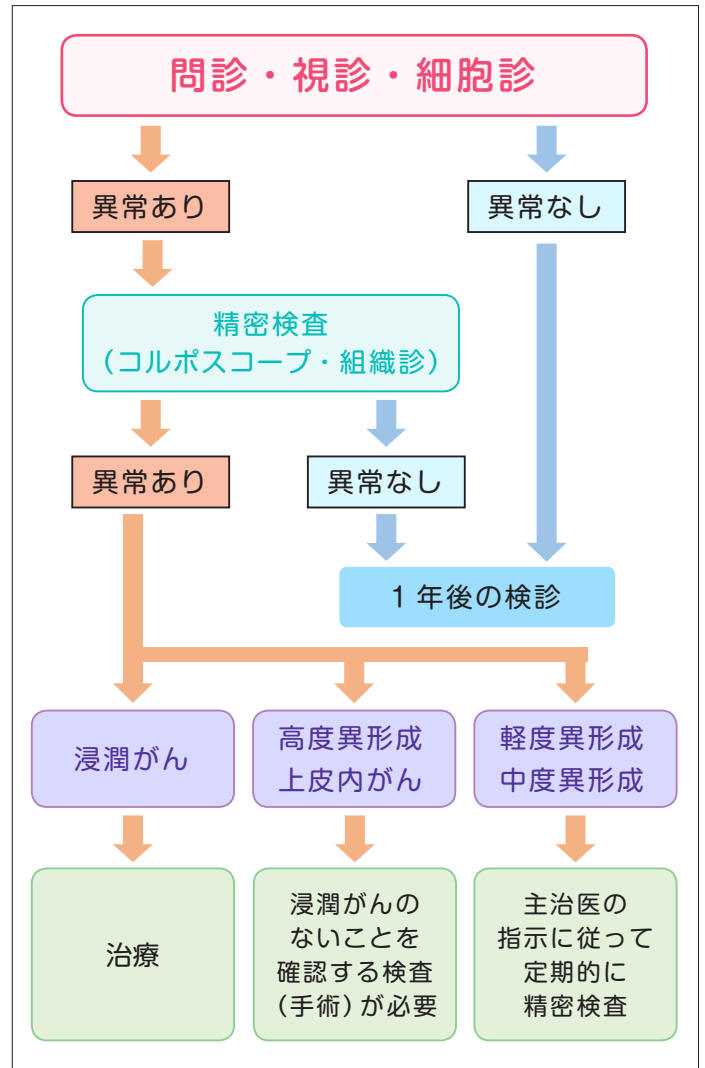
3. 子宮頸がんについて

子宮頸がんについては、不正出血（月経ではない時期に出血がある、閉経したのに出血があること）などの自覚症状が出現する前ががん検診によって異常を察知することが早期発見につながります。子宮頸がんは年間約1万人が罹患し、約2900人が死亡しており、患者数・死亡数とも近年増加傾向があります。20歳代から40歳代の患者さんが増えています。

ヒトパピローマウイルス（HPV）が持続的に長く感染し続けるごく一部の女性において、軽度異形成、中等度異形成、高度異形成、上皮内がんという前がん病変を経て、数年程度かけて子宮頸がん（浸潤癌）が発生することがあります。

異常が見つかった場合は、ただちに精密検査が必要です。がん検診の異常の種類によって、まずHPV検査を行う場合と、ただちにコルポスコピー（膣拡大鏡）と生検（組織検査）を行う場合があります。

【図1 子宮頸がん検診の流れ】



4. 子宮体がんについて

子宮体がんについては、不正出血がある場合や、表に示すような、「子宮体がんの主な危険因子」に心当たりがある女性は定期的な婦人科検診を受けることが大切です。子宮体がん検診で異常が見つかった場合は、子宮の内膜を一部こすったり吸引するような精密検査を行う場合があります。【図2参照】

TOPICS

ヒトパピローマウイルス (HPV) と HPV ワクチン・子宮頸がん検診

子宮頸がんが発生する原因は、ヒトパピローマウイルス (HPV) に持続的に感染することであると考えられています。HPV は性交渉により感染し、多くの女性が一生に一度は感染すると言われる、ありふれたウイルスです。通常はウイルスに感染しても、異物を排除する免疫機能により排除されますが、ウイルスが排除されずに長期間感染が続く場合があり、ごく一部の人の細胞ががん化する事があります。男性も HPV に感染しますが、がんを発症することは男性はごくまれです。

HPV の感染自体を予防して前がん病変・子宮頸がんを発生させないように予防するのが HPV ワクチンです。

現在使用可能な HPV ワクチンは、子宮頸がんの約 6～7 割を予防できると考えられています。日本では HPV 接種後に慢性頭痛や運動障害が出現したという報告があり、



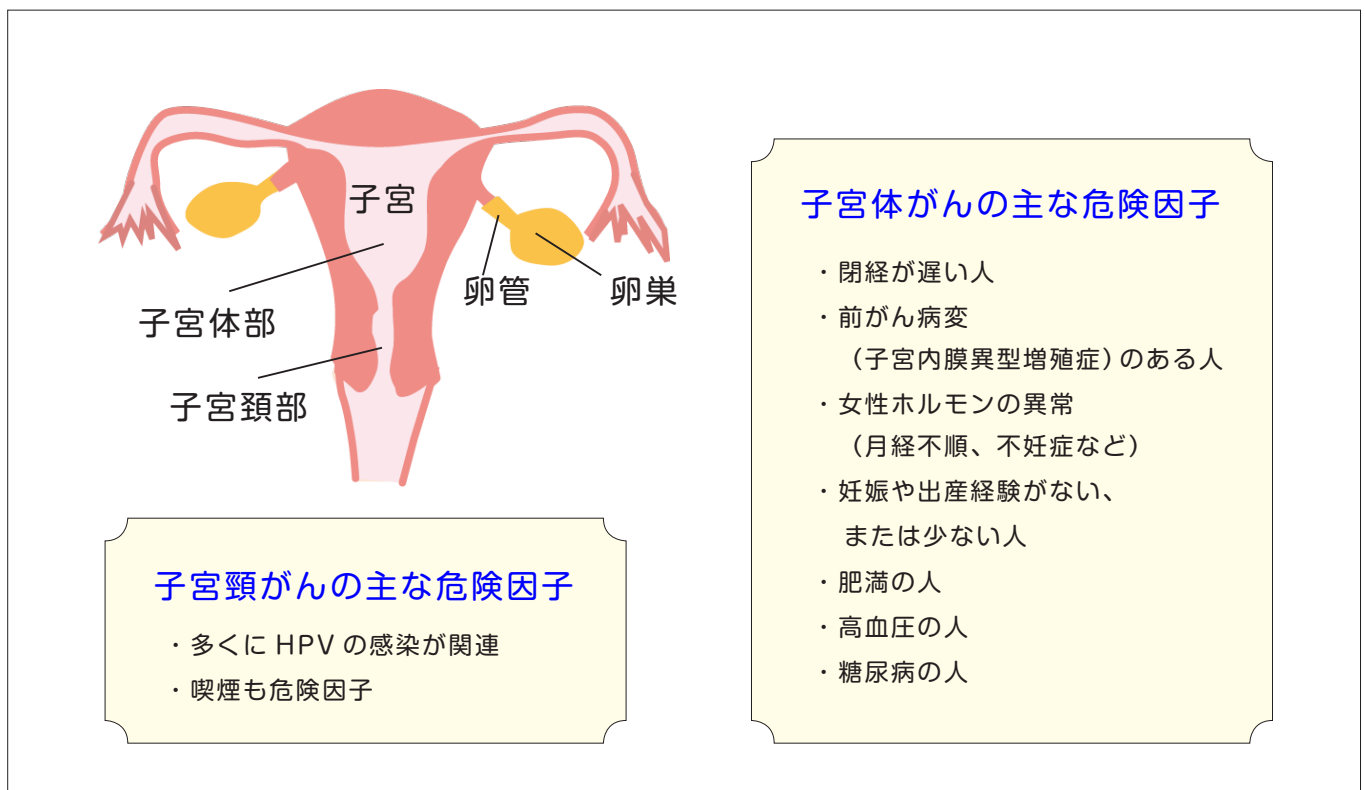
厚生労働省では積極的勧奨はしておりません。しかし、WHO では世界中の最新データを継続的に解析し、HPV ワクチンは極めて安全であるとの結論を発表しています。

HPV ワクチン接種を国のプログラムとして早期に取り入れたオーストラリア・イギリス・米国・北欧などの国々では、HPV 感染や前がん病変の発生が有意に低下していることが報告されています。これらの国々では、ワクチン接種世代と同じ世代のワクチンを接種していない人の HPV 感染も低下しています (集団免疫効果といいます)。

また、最近のフィンランドの報告によると、HPV に関連して発生する浸潤がんが、ワクチンを接種した人たちにおいては全く発生していないとされています。日本においても HPV ワクチン接種が広がるのが切望されます。



【図 2 子宮がんとは】



引用：患者さんご家族のための子宮頸がん子宮体がん卵巣がん治療ガイドライン第 2 版
日本婦人科腫瘍学会 金原出版株式会社